

広島俳句倶楽部

令和四年十二月作品集

親から子に

すみれ

定年後、古里に山荘を建て、休耕田を耕し、蕎麦を植えた。野菜を作る喜びを知り、色々な野菜を育てた。しかし、突然の病で野菜作りができなくなり、残念に思っていたところ、荒地となっていた畑に子が種を蒔いてくれた。そして、孫が山里の栗拾いを楽しみはじめた。山荘での素麺流しも、焚火も、雪遊びも恒例になった。田舎を好む子らの一家に山荘を託す事になったことを嬉しく思う。

秋耕の父と子鋤を競ひ振る

鎌を研ぐ若者の手に秋夕映

釣堀の山女魚を焦がす星月夜

萩の花散らし隠るる子らの声

杉落葉子はファイヤーと集めをり

山荘の男二人の松手入

熊笹を刈り隣人と新酒酌む

屁放虫そーと追ひ出す量かな

山荘にござる寝の親子出すだく

裏山の秋風強き山の家

《作品鑑賞》

ちどり

すみれさんは、突然の病に罹られても以前と同じように俳句を楽しんでおられる。また、山荘の生活を子供らに託し、喜んでおられる。どんな厳しい環境になってもそれを引き受け、自分らしく生きる。私も、すみれさんのようでありたい。

萩の花散らし隠るる子らの声

萩の花を散らしながら、自然の中でかくれんぼをしている子らがほほえましい。

熊笹を刈り隣人と新酒酌む

隣人と男二人で山荘の熊笹を刈り、こざっぱりした山荘で新酒を酌む。さぞ旨いだろう。

裏山の秋風強き山の家

裏山に身に沁むほどの秋風が強く吹いている。しかし、山荘の中は、暖かい。

胡麻干すやもう人住まぬ門長屋

大路終へ土地の新酒を買ひにけり

稲刈を済ませ神休山の前

後円に立つて眺むる吉備の秋

秋草や沖に白波また立ちて

もみぢ葉にほどよく風の吹きにけり

駅に行く人の通りぬ柿簾

石路の花新しくして町古ぶ

公孫樹枯れ鯉はしきりに石につき

うすうすと雲流れゆく枯公孫樹

佐保光俊

母の部屋近く山茶花咲き始む

朴落葉踏んで氣持の晴れにけり

着ぐるみに向けハイタッチ小春かな

近道に散り敷いてをり柿落葉

水際に落ちては寄する木の葉かな

色違ひ合はせて来ね寒の菊

掛軸の暮れてゆくなり冬座敷

仏壇に蜜柑を供ふ閑戦日

薪焼べてストーブの火を眺めをり

薬飲む湯の沁み亘る霜夜かな

村上正人

鰯跳ねて跳ねては跳ねてまた跳ねて

紅葉する桜と私同い年

草の実を払ふと言うて休みをり

飛んできて背を向けにけり尉鷗

初しぐれ止めばすぐ来る雀かな

せせらぎの奥へと咲いて石路の花

風やんではらりと紅葉散りにけり

ここの赤あそこの黄いと紅葉散る

寒木瓜にしづかに鯉の浮き沈み

降り積もる落葉の道の樂しけれ

高尾ひとみ

山水でざぶざぶ冬菜洗うたり

冬菜畑屑焼く煙真つ直ぐに

うつすらと霜降りし橋猫渡る

うたた寝を覚めれば窓に冬の月

熱き湯にゆつくり沈む寒夜かな

湯上りの赤子を包むちやんちやんこ

ラーメンの湯気ねんねこに子は眠る

名物のラーメン啜る雪まつり

底冷の街でラーメン屋に並ぶ

ラーメン食べ若さ寝め令ふ女正月

あざみ

様々な鳥の声して天高し

今落ちし木の実をひとつ拾ひけり

見上ぐれば木の実の落つる音がする

城址へ子の駆け上がる空高し

川の面を黄の秋蝶飛びゆけり

秋澄みて小学校のチャイムかな

チエンバロに草木の描かれ星月夜

目の前を秋の蚊の飛ぶ厨かな

びしよ濡れのズック勤労感謝の日

小春日の波を聞きつつ砂を踏む

亜矢

公孫樹散り君が校内放送す

父のため公孫樹落葉を集むる子

鷺一羽すくと立ちたる冬の川

ステッキを突く音をさせ落葉道

床につく義父に呼ばれて石路の花

フラメンコギター聴きゐる霜夜かな

吸呑の水の冷たし夕まぐれ

優しきと患者に言はれ小雪降る

冬の夜のサービスエリアのラーメンよ

学食で寒稽古の君待つてをり

綾乃

通院や土手の芒が頬にふれ

朝明けや粧ふ山が窓に見え

鹿の来てひときは濃ゆき谿紅葉

橋の上水音高し紅葉川

雲の色たちまち変はり秋の暮

散り紅葉小溝の流れ堰いてをり

尾道のラーメン啜り冬紅葉

船客の鳥居に見入る小春かな

冬の虹家に着くまで消え残り

受験子のチャルメラを聞く夜更けかな

山肌を挟る重機や冬景色

短日や遺言状を書いてみる

冬の夜父母の写真に話しかけ

故郷の写真に見入る炬燵かな

粉々の枯葉踏みゆく大社

滝涸れて露はになりし巖かな

窓閉める間に落る木の葉かな

冬日向地域の猫の集ひ来る

朝市に並びたれども冬の雨

息白し色紙で折る次の干支

故郷よ山深く鹿鳴き令うて

吾亦紅摘んで仏に供へけり

嫁と行く千代の生家の紅葉かな

宇野千代の生家に仏と紅葉あり

ワイン飲み嫁と語らふ夜長かな

風もなく庭の紅葉の散れる音

大公孫樹青き空から散りにけり

冬紅葉眺めて歩く千代の庭

冬の灯に錦帯橋の浮き上がる

寒月の明りに辿る家路かな

井藤希

栄吉

大畑恵

茶が咲いて峽にまた来る日照雨かな
 貨車の列浦曲に消ゆる冬苗
 鳩追うて笑顔になる子七五三
 水涸れて谷に鳥声響きけり
 冬の空沖にゆくほど明るくて
 一隅に山茶花咲かせ山住まひ
 島の路地抜ければ冬日燦燦と
 枇杷の花産着やさしき色多し
 冬霧の傍いては流れ峡深し
 冬暁のまだ高くある眉の月

暁子

夕食の冬菜を取りに子と畑へ
 草の霜踏めば音して碎けけり
 恵比須講友と歩きし商店街
 雪螢石階長き兄の墓
 浮寝鳥一陣となり波に乗る
 山莊の温もれば飛ぶ冬の蠅
 通学路生徒とともに落葉掃く
 十二月母の仕立てた着物解く
 子のピアノ聞きに枯木の道を行く
 石を積む子の手の赤き冬の川

すみれ

色変へぬ松の影より歩み出す
 目の前に木の実を落とす鴉かな
 散紅葉沈みしままの鯉の群
 あらかたは落葉となりし大樹かな
 鳩飛んでまた舞ひ上がる落葉かな
 落葉道渡り終へたる園見達
 見る度に色濃くなりて冬木の芽
 立ち止まり初雪を見る小路かな
 手入れする人ばかり居て冬の園
 街にまだ人行き交ひて冬の月

知佳子

霧の上朝日ゆつくり昇り来る

故郷の霧の一気に晴れにけり

どんぐりで園児はへびを作りをり

故郷のあちらこちらに冬芒

母が家で朝寝坊せり霜の朝

母の畑景物すべてに霜の降り

山茶花やシヨートステイに母送る

すき焼を母と娘と食べにけり

窓開けて雪の朝は静かなり

雪の朝一羽の鳥の鳴いてをり

小鳥来る下を通りて灯台へ

秋日和ひとりで渡る沈下橋

秋川の流れを聞ける沈下橋

西の果て秋の夕日をしばし見る

露店にて薩摩芋買ふ旅路かな

秋遍路腰の鈴音聞こえる

眠たさに波を見てる秋の旅

子が癸つて秋夕焼にしばし立つ

晩秋の段畑力み登りたる

山茶花の散りし花びら見て通る

引き出しに空間風邪薬の跡

高音の目覚まし時計風邪の朝

反抗期も作るという雪達磨

道端に同じ作者の雪達磨

一晩中私の上に雪積もる

本を揺らし雪をかぶつて笑う人

立ち尽くし払ってもらう雪礫

寒月に雪を投げたり降らせたり

窓の雪ふわふわ燃えているような

ここはまだ知らないところ朝の雪

ちどり

雲雀

ふじ女

唐白の音のしてゐる谷紅葉

柿もみぢ斑模様のまま落つる

散紅葉先人掘りし井戸を汲む

薄すぎて冬の蚊すぐに見失ふ

冬の蚊のカーテン裏に消えにけり

朝の日にまみれて冬蚊動かざる

時刻表櫓木明りに見てをりぬ

背中より落葉踏む音近づきぬ

ラーメンとおでん二本がちようど良し

ラーメンで締め暮き日の忘年会

松田裕子

秋晴や山頭火の碑海を向き

山稜のバス停留所降りて秋

城跡にしづかに散つて冬紅葉

山茶花の散り敷く道を降りたる

落葉かな散るならば散れまた掃かん

紫垣の内を転々冬雀

一つ家にともす一灯寒夜かな

出払ひし交番に見る聖樹かな

断捨離をしてまた拾ひ去年今年

小松菜を音させ食ぶる朝餉かな

森口良樹

一筋の滝の懸かりて初紅葉

楓紅葉かき分け滝に着きにけり

泉水に映る紅葉を通り過ぐ

散紅葉掻き分け鯉の泳ぎけり

寺の庭一面公孫樹黄葉散る

水口に鯉の集まり石路の花

山の端の裸木透かし朝日出づ

茶の花や川の向うを汽車とほり

冬の夜ラーメン啜り列車待つ

秋沙

枯葦に傾いてゆく日の差せる

ポストへの裏路地照らす冬の月

二階より咳聞こえたる厨かな

斜交ひに日の差してきり冬の薔薇

北風の三つ目の橋渡りけり

山門に悴む両手合せたり

襟巻に顔埋めしまま用済ます

着ぶくれの上に前掛の紐結ぶ

客降ろしタクシー去りぬ冬の雨

緑濃き稲田続く通過駅

原民喜旧居の柳散りにけり

公園に誰も居ぬ日や冬立ちぬ

遠く海見ゆる玻璃戸や冬に入る

小六月ワクチン接種済みし帰路

霜月や顔にピタピタ化粧水

浮寝鳥ぐんぐん伸びる飛行雲

冬雲の動かぬ空や通院日

冬籠シヤガールの絵の饒舌に

月蝕を見てゐる肩へカーディガン

号令を掛けたることく木の葉散る

七五三花かんざしの重かりき

対岸の灯りの遠き落葉時

通り風落葉の二三ひるがへす

二人の子落葉かけ合ふ夕べかな

来年も堆肥にせむと落葉掻く

寒月をかすめて夜間飛行かな

幼子や聖樹の星を欲しがりて

桑門わかこ

辻純江

村上理江

肩に融る厨に吊りし唐辛子

リュック背に園児連なる蜜柑山

出張の始発のホーム息白し

母送る玄関脇に冬すみれ

裸木の中の鳥声歩を止むる

広縁に朝刊広げ日向ぼこ

産近き牛を見てゐる日向ぼこ

伏す母のための大根煮てをりぬ

鳥声に耳澄ましつつ寒肥す

山野ウタ

門柱の残る医院や冬茜

接待のあとはおでんに中華そば

寒灯や眼鏡くもらせ麵啜る

替へ玉を僕も僕もとラガーマン

冬深し父の好みし醬油ラーメン

大鳥居見上げてをりぬ冬日和

凍星を数へて向かふ仕事かな

高梨英子

夜なべ終へ高菜ラーメン啜りたる

冬夕焼吾と犬との影長し

引きたての大根下ろして朝餉とす

病棟をナースの走る十二月

星凍てて列なす小さきラーメン屋

屋台から出れば寒星高くあり

北風に耳を押さへて通学子

友岡崇山子

秋空の鳥を電車の窓に見て

秋晴や自転車漕ぐ足軽く

秋の山水彩絵の具落とすごと

糰栗を開けば虫に食はれるし

恵比寿講子らの笑顔に太鼓鳴る

赤と黄の落葉拾うて歩きけり

中野明美

弟も居て恒例の牡蠣料理

牡蠣飯を炊いて届ける坊守さん

冬山の大本伐りし香りかな

冬の日の人恋しくて日の暮るる

今年また蓮根届く師走かな

紀英子

冬の鳥庭木の枝に二羽とまる

冬の薔薇一輪咲いて日のあたる

北風を雀の群の飛んでをり

蕪蒸義母と並びて作りたる

堀越しに臘梅香る伯母の家

美耶

さざん花の咲いて中央分離帯

初雪や日差の中を舞ひながら

天上の隙間から雪舞ひにけり

北風をまともに受けて歩きけり

金川昭子

室元の高き煙突枇杷の花

保母さんのハンドベル聴く十二月

夜半の雨上がり大根引く日和

強風の地に伏し獺犬狙ひをり

熊谷ゆり子

病院へ通ふ坂道しぐれけり

備畑に大根百本育てをり

大掃除済ませ大根干しにけり

北吹いて電線の鳥散り散りに

高嶋絹代

床に入る耳に北風届きたる

朝一番となりの屋根の雪見上ぐ

四つ割にして白菜を並べたる

白葱の太き葉元を切り落とす

民

禪寺の公孫樹落葉に日の差せり

爪を切る音静かなり冬の雨

冬日向車上に猫の寝ころびて

十二月街に車の連なれり

やす保

ずつしりと片手に重き大根かな

風邪の身にテレビを早く切り上げる

対岸へ白鳥低く飛び立ちぬ

上島康子

抜きたての大根一本隣より

ワクチンの行列づく霜の朝

雪道に踏み出す足に力込め

河原静子

冬日和富士の裾野の広がりにて

肘掛に本置いたまま日向ぼこ

牡蠣打ちの老女の指に傷あまた

撫子

ぞろぞろと曾孫の伴や七五三

新聞に大根包めばはみ出して

大きめのおでんの大根箸で割る

みさ子

冬の夜プロレスを見て元気かな

阿波久

令和四年十一月度作品集より

曉子 私の選んだ十句

大あけび右と左で村分かれ	佐保光俊
綿虫を目で追うてまた見失ふ	村上正人
鳥籠に布かけてやる月夜かな	亜矢
坂上る神輿の声や秋の晴	井藤希
一村を越えて行きたび秋深し	すみれ
鹿の角まだ鉛筆の細さかな	ふじ女
木の実落つ祠の屋根を叩いては	松田裕子
餌を待つ鯉の泡や小六月	村上理恵
出雲路の旅の終りの走り蕎麦	高梨英子
畑まで霜踏んでゆく朝かな	上島康子

すみれ 私の選んだ十句

鬼ノ城をかくも離れて後の月	佐保光俊
短日や学習塾の灯の明し	村上正人
枇杷の花朝の日差にほころびぬ	高尾ひとみ
冬日背にゆつくり坂を上りけり	あざみ
鳥籠に布かけてやる月夜かな	亜矢
柿落葉一枚選りてより掃きぬ	栄吉
園児らの手にそれぞれの色葉かな	曉子
吊し柿駄屋の二階に二十連	ちどり
芒原抜けて着きたる山の宿	雲雀
鋏を打つ冬の畑の日溜りに	山野ウタ